

# 聖書日課 『からし種』 2020.1.19-1.26

<p><b>19日 (日)</b></p> <p>サムエル下 10章</p>	<p>「我らの民のため、我らの神の町々のため、雄雄しく戦おう。主が良いと思われることを行ってくださいように」(12節)。アンモン王に金で雇われたアラム兵は、戦わずしてヨアブとアビシヤイの前から逃走した。戦いは「数」ではない。自分の命を賭けるだけの「正義」を持ち得ているかどうか。私たちは何のために誰と戦おうとしているのか。み言葉を前に点検したい。</p>
<p><b>20日 (月)</b></p> <p>サムエル下 11章</p>	<p>「翌朝、ダビデはヨアブにあてて書状をしたため、ウリヤに託した」(14節)。「名君」と呼ばれたダビデの中に巣くう欲望と狡猾さと残忍さを、聖書は克明に書き記していく。「あなたの御言葉は真実です」(7・28)と神の前に祈るダビデは、ウリヤを抹殺できてしまうダビデでもある。善と悪が分かちがたくからみあう、わたし自身の姿を見つめる者とされて。</p>
<p><b>21日 (火)</b></p> <p>サムエル下 12章</p>	<p>「ダビデはその男に激怒し、ナタンに言った。『…そんなことをした男は死罪だ』。…ナタンはダビデに向かって言った。『その男はあなただ』」(5-7節)。自分の罪にはひどく鈍感なのに、他人の小さな罪を正論で厳しく裁く。わたしが持ち合わせている、実に都合良い「二重基準」こそが罪ではないか。今日そのわたしの罪に気づかせてください。</p>
<p><b>22日 (水)</b></p> <p>サムエル下 13章</p>	<p>「タマルは灰を頭にかぶり、まとっていた上着を引き裂き、手を頭に当てて嘆きの叫びをあげながら歩いて行った」(19節)。前章のナタンの厳しい預言(あなたの家に悪を働く者を起こす)が次々に実現していく。ダビデの言動を見ていた息子たちは同様の罪を重ねて悲劇の泥沼にはまってしまう。私たちはどこで立ち帰ることができるのだろうか</p>

<p><b>23日</b> <b>(木)</b></p> <p>サムエル下 <b>14章</b></p>	<p>「ヨアブは、王の心がアブサロムに向かっているのを悟り…語るべき言葉を彼女に与えた」(1、3節)。息子たちの「非行」をきちんと咎め正すことのできないダビデ。彼自身の揺れる心が王家の悲劇をさらに深くしていく。司令官ヨアブとの力関係の影響を受けながら、主なる神に「どうすべきか」を尋ねる機会を失うダビデ。私たちは誰の言葉を尋ね求めるのか。</p>
<p><b>24日</b> <b>(金)</b></p> <p>サムエル下 <b>15章</b></p>	<p>「アブサロムは…イスラエルの人々の心を盗み取った」(6節)。権力のもとで自己保身から陰謀と策略、だまし合いに腐心する人々の姿が浮かび上がる。神を畏れることを失った人間の権力は、互いに滅ぼし合う愚かさを露呈していく。この抗争に救いはない。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」(ヨハネ 15・5)という主イエスの言葉をかみしめて。</p>
<p><b>25日</b> <b>(土)</b></p> <p>サムエル下 <b>16章</b></p>	<p>「そのころ、アヒトフェルの提案は、神託のように受け取られていた。ダビデにとっても、アブサロムにとっても…」(23節)。「神の言葉」を語るかのように重用された顧問アヒトフェルだったが、ダビデとアブサロムの間で自己保身を考えるような男にすぎなかった。「神の言葉」は、人間の都合に利用されることなく、ただ神に仕える信仰において聴かれていく。</p>
<p><b>26日</b> <b>(日)</b></p> <p>サムエル下 <b>17章</b></p>	<p>「この言葉はアブサロムにも、イスラエルの長老全員の目にも正しいものと映った」(4節)。主の民イスラエルの歩みは、決して主の計画に適ったものではなかった。しかし人の目には、主の正しさとして映っていった。人間の「正しい」と思える決断の裏に、失われる命があることを聖書は語る。主の正しさを祈り求めながら、歩む私たちを、主よ、憐れんでください</p>